

『Lady Gregoryの作品に見られるゲール語法について —*A Book of Saints and Wonders*より』

Gaelic Idioms in English Found in *A Book of Saints and Wonders* by Lady Gregory

八木 茂那子*
Monako YAGI

はじめに

本研究はアイルランド文芸復興期の作品に見られるゲール語法研究シリーズのひとつである。

グレゴリー夫人 (Lady Augusta Gregory) はアイルランドの劇作家、演出家、伝承研究家、翻訳家であるがアイルランド文芸復興運動¹⁾の母と称され、地元農民が語る言葉、古代アイルランドの神話伝説をアイルランド人が自己表現する新しいことば (アイルランド方言) として劇作品へ導入した最初の人と言われる。彼女のKiltartan Englishは当時一種のファッションとなり、J. M. Syngeを始め復興期のアイルランド作家のみならずMark TwainやThomas Hardyといった英米文壇に名を残す数多くの文豪達の作品にもその語法を垣間見ることができる。彼女と交流があった事実は今日なお、贈られた寄書きの扇子やCoole Parkの邸宅跡の木に刻まれた署名のその数から彼らに与えた影響の大きさを伺い知ることができる。

本稿では『グレゴリー夫人の作品に見られるゲール語法について』と題し、*A Book of Saints and Wonders, Book Three Blessed Patrick of the Bells*の中から*The Four Households*を取り上げる。これは夫人が地元の農民たちから長年にわたり収集してきた口承による古代ケルト神話・伝説をゲール語 (Irish Gaelic) 或いはアイルランド方言 (Hiberno-English, Irish-English, Anglo-Irishとも呼ばれる) で書き記したものである。本研究は対象作品中の特徴的なところ、語 (句) の由来をその母体となったゲール語にまで遡って解明しようとするものである。本稿は1. 用語 2. 時代背景 3. 作家紹介 4. 作品のあらすじ 5. 作品中に見られるゲール語法について 6. まとめ から成る。更に4のゲール語法に関しては ①1行目: テキスト原文 ②2行目: ゲール語 (現代アイルランド語) の直訳 ③3行目: ②の英語の直訳 ④4行目: 標準英語 ⑤日本語訳 (拙訳) の5行を1セットとして説明を加えていく。

1. 用語

1.1 ゲール語 (Gaelic)²⁾: 本稿ではIrish Gaelic (島嶼ケルトと呼ばれるアイルランド語、スコットランド語、マン島語、等の総称、現代スコットランド語、マン島語を除く) をGaelicと呼ぶ。かつてア

* 埼玉工業大学人間社会学部非常勤

イルランドでは自分たちの言語をGaedelic (Goidelic) と呼びGaul (外国人、ゴール人) と区別していた。アイルランドのスコット族がスコットランドへ移住し、彼らが話したケルト語に現地のピクト族が話すケルト語が混じり、今日のScottish Gaelicへと枝分かれし、発展していった。一般的には英語ではGaelicはScottish Gaelic (ガーリックと発音) を指し、Irish GaelicをIrishと呼んでいるがIrishということには差別的な意味合いが含まれるので本稿ではゲール語 (Gaelic) を使用する。

1.2 Anglo-Irish : 一般的には英国系アイルランド人のことを指すがグレゴリー夫人、イエイツ、シングラの文学はアングロアイリッシュ文学と呼ばれ、また彼らが文学作品の中で使った方言、アイルランドで使われる英語方言のことをAnglo-Irish (Celtic Renaissance期の作家たちが使った文体をも含め) を指す。Irish Gaelicの影響で独時の文法、発音、idiomを持つ。英語の方言の中でも最も美しいと言われている。政治的な意味合いを持つこともある。本稿では以下AIと表記する。

1.3 Irish-English : 一般的にはアイルランドで使用される英語の一方言を指す。

1.4 Hiberno-English Hiberniaはラテン語でアイルランドのことである。アイルランド国内では自分たちが話す英語方言をHiberno-Englishと呼んでいる。以下HEと表記する。

1.5 Kiltartan English Lady Gregoryは彼女が生まれ育った、アイルランド西部Galway州、Roxborough周辺、Kiltartan地方の農民たちが使う言葉をKiltartan Englishと呼んだ。

1.6 以上本校稿ではAnglo-Irish, Irish-English, Hiberno-English は同義語とみなす。

1.7 アイルランド方言に対し、Standard English (以下SEと略す) を共通英語と呼ぶ。

2. 時代背景

Irish Renaissance (Celtic Renaissance) は自国の古代黄金時代ケルト文化の復活という点でギリシャ・ラテン文化の復活を掲げたヨーロッパ諸国のものと大きく異なり、歴史的、政治的、宗教的、民族的、文化的、語学的様々な要素が複雑に絡み合っている。そこで、まずアイルランドの時代その概要を簡単に述べておく。

2.1 有史前～B.C.3000年頃

B.C.3000年頃アイルランド島にやって来たと言われるケルトの3部族は高度に発達した音声言語(ゲール語)と膨大な数の神話、伝説を島に持ち込んだ。彼らの先祖はドイツのエルベ・ダニューブ川上流から南下し、同じケルトでもブリテン島に住むケルト部族とは移動経路が異なり地中海、イベリヤ半島を経由してきたことからギリシャ・ラテン文化の影響を強く受けていた。こうしてケルト単一民族国家が話される言語はゲール語(Qケルト)、宗教はドルイド教で文字は持たず口承による伝統文化を形成していった。

2.2 (～A.D.500年頃)

A.D.500年頃まではアイルランドは5つから成る部族国家と成り、各国はri(リー)と呼ばれる族長が、更にその5部族は大王ard ri(アルドリー)により支配されていた。

一方B.C.55-54年 隣のブリテン島にローマ人が来襲、その後A.D.43-41年までローマの支配下に置かれた。ローマ軍撤退後A.D.426年頃からJuts族, Saxon族, Angle族がブリテン島に移住、今日のイン

グラントの基礎を築いた。その一方アイルランドは島国であり、周りが海という自然の要塞に囲まれていたことによりその後もイギリス以外の異民族からの支配を免れてきた。これはアイルランド独自の文化を形作る大きな要因のひとつと考えられる。

2.3 キリスト教の伝来

その後A.D.432年頃St. Patrick等によりキリスト教が布教されアイルランドは平和的にキリスト教国家となったが、土着のドルイド教と結びつきローマンカトリックとは異質のPagan Irelandとして定着していった。5世紀～11世紀にかけ、古代ケルト文化が開花、アイルランド各地に修道院が建てられ、ヨーロッパ各国から学僧が留学のために来島した。

2.3.1 St. Patrick

St.Patrickに纏わる数々の伝説、奇跡、史跡があるにも関わらず、彼自身の歴史的文献他学術的な根拠となる物は殆どなく、生没年不詳、諸説あるが通説ではA.D.386年ブリテン島南西部に生まれA.D.461年3月17日Saulにて没、Downpatrickに埋葬されたとされている。彼には4つの名前があり、歴史上St. Patrick と呼ばれる人物は少なくとも二人いたといわれる。そのうち自身の真筆によるものとされるラテン語で書かれたConfessio (Confession)『信仰告白』と書簡から後者のラテン名Patriciusが有力視されている。彼の父はローマ人のDeacon、Calphurnius、母はブリトン人Concessa、(一説にトゥールの聖マルティヌスの妹)、また祖父のPontiusも聖職者であったという、ブリテッシュローマンであった。

Confessio (Confession)『信仰告白』によると彼は16歳の時に奴隷としてアイルランドに連れて来られた。このConfestus (Confession)『信仰告白』と書簡により僅か乍ら彼のアイルランドにおける足跡を知る事ができる。

2.4 ケルト古代黄金文化時代 (A.D. 5世紀以前～11世紀頃)

9世紀頃からアイルランドはたびたびバイキング来襲に見舞われた。Dublin (dubh linn, black poolの意)はバイキングが塞を築いた所でバイキングがつけたケルト語に由来すると言われる。アイルランドは島であり、ブリテン島とアイルランド海で隔てられているため、また教会にある宝飾の聖杯や写本はround towerに持ち込んで守り難を逃れた。ブリテン島ではローマの支配下に置かれたために征服者であるローマ人のラテン語が英語の中に大量導入されたのに対し、アイルランドでは定住した一部のバイキングたちの方がアイルランドに同化していった。1014年、The High King のBrian BoruによりVikingが撃退され、その後Norman人が来襲。ここでもNorman人の方がアイルランドに同化し、借入語を導入する程度でゲール語に対し多大な影響を及ぼすまでには至らなかった。このようにバイキングやノルマン人など定住した人種が持ち込んだ「外来語」がアイルランドにおける英語方言の発達に影響を及ぼし、全土が一様ではないひとつの理由に挙げられるであろう。

1541年英国王King HenryⅧがアイルランド議会にてIreland王を宣言、更にJames Iがアイルランド国王となり、Dublinと北アイルランドを中心に入植を始めた。こうしてアイルランドは英国最初の植民地化に向け、1922年の独立に至るまで約400年にわたる長い闘争の歴史が続いた。この間英国教徒の英

国人の地主とカトリック教徒の貧しい小作農という二重構造の格差社会が形成され、ゲール語は禁じられ、学校でも英語を話すよう強制された。しかしゲルタハトと呼ばれる地域ではゲール語が日常語として使われていた。

2.6 大飢饉から独立へ

ゲール語人口が激減したのは1845年～1848年にかけての大飢饉のためであった。主食のジャガイモが不作でこの3年間のアイルランドから100万人以上がアメリカ合衆国を中心とした海外へと移住していった。その結果ゲール語人口は激減し、人々は自信を失い、古代ケルト文化の伝統や誇りそしてゲール語も忘れ去られていった。そうした中でDouglas Hyde等率いるゲール同盟がアイルランド各地に設立され、古代黄金時代のゲール文化復興運動の気運が高まり、自治法の獲得、イースター蜂起とさらに独立のための戦いが続き1920年アイルランド共和国としてイギリスからの独立を果たした。

3. 作家紹介

3.1 イサベラ オーガスタ グレゴリー夫人 (Lady Isabela Augusta Gregory) (1852年3月15日～1932年4月23日) はIreland西部のGalway州Roxboroughの地主で、英国教の牧師でもあったダドウリー パース (Dudley Passe) の8男5女の末娘として生まれた。彼女の父は17世紀にアイルランドへ渡ったとされる旧家ノーサンバーランド公爵の末裔にあたり、Shakespeareの劇中に登場し、パース家の名前はパーシー (Percy) と呼ばれているという典型的なAnglo-Irishであった。彼女は当時上流階級の子女がそうであったように伝統を重んじるパース家で乳母により養育され、また家庭教師による教育を受けた。パース家は、父も母も文化・芸術には全く関心がなくアイルランドの詩人の作品や土地の小作農民のことは等にも全く関心がなかった。

3.2 乳母メアリー・シェリダン (Mary Sheridan)

Augustaはその幼少期に40年間パース家に仕えた乳母メアリー シェリダンから多大な影響を受けたと言われる。幼少期の彼女はメアリーが語るキルタータンイングリッシュ (Kiltartan English) の物語の世界に夢中になった。メアリーは1830年代後半にロスクバラに来たThe United Irishmanでオレンジ党のRowen Hamilton家の家人の生き残りであり、生粋のアイルランド人でカトリック教徒であった。メアリーは彼女の母に欠けた愛情に満ちた権威を持ち、またアイルランド古代神話伝承文学の生き字引、優れた語り部でもあった。メアリーは子供達に乞われるままヨーロッパやアイルランドのおとぎ話を語り、Augustaは秘密のレッスンを受けていたという。また少女のAugustaは小遣いを貯めては5マイル (約8キロ) 離れたLochreaの本屋に行き、Finian (アイルランド古代ケルト神話) の本を夢中になって読んでいたという。彼女の古代アイルランド文学への興味関心はすでに幼少の時から、こうした乳母メアリーの存在と本も満足に読めない家庭環境、民話伝説の背景となるその風光明媚なアイルランドの自然の中で培われていったものと言えよう。このように、後にIrish Renaissance運動の陰の立役者として重要な役割を果たし、やがて英米の著名な文人達にも影響を及ぼすに至ったLady Gregoryの文学活動の原点が、殆ど無名ともいえる一使用人にあったというのは興味深いことである。

3.3 ゲール語の修得

彼女が古代ケルト神話の価値に目覚めるとその情熱は更に増していった。ゲール語を学びたいと2度3度試みるも「笑われるのではないか」という恐れとゲール語教師のやる気のなさ、更にゲール語文法の難しさから何度も挫折を味わった。彼女を「語学の天才」と評する評論家もいるが、ゲルタハト (Gaelic speaking area) で育った彼女でさえゲール語の修得は決して容易なものではなかったことが伺える。

3.4 転機

彼女の転機はSir William Gregory との結婚であった。Augusta 28歳、Williamは当時ロンドンにあるNational Galleryの館長であった。学者で、洗練された人柄、芸術を理解する人物であった。又彼を通して当時の英文学に名を残す有名な作家、政治家達と交流することによりAugustaはロスクバラ近辺のみに限られた偏狭主義からの脱却、宗教、アイルランド人、英国人といった壁を超えたりベラルな文化交流の流れはのちに館を本拠地として「Irish Renaissanceの温床」と言われることとなる。

Gregoryに贈られた扇子の寄せ書きにはTenysonや Henry James、J.B. ShawをはじめMark TwainやThomas Hardy、J.M. Synge、George Moore、Sean O'Casey、Douglas Hyde、W.B. Yeats、Edward Martynといった著名な作家や詩人の名が記されている。Mark Twain の*Adventures of Huckleberry Finn*やThomas Hardyの*Tess of the d'urbervilles*のTessの語る言葉の中にAnglo-Irish語法を見出しても何の不思議もないのである。彼女の*The Kiltartan Poetry Book*に³⁾ よると

これらの詩の翻訳するにあたり私はこれらを聴いたり集めたりしたかやぶき屋根の家のことばを選んできた。An Craoibhin (Douglas Hyde) は既にこのゲール語構文、エリザベス朝の句を*Love Songs of Connacht*の翻訳に使ってきた。私が著作でも使ってきたように。Syngeは私のCuchulain of Muirthemnelに彼がマスターしようとしていた方言を見出した時、彼はまだそれを使ってはいなかった。(拙訳)

と述べている。またYeatsは彼の自叙伝⁴⁾の中でGregory夫人と神話伝説を収集した時の様子を次のように記している。

1897年の夏私はクールで過ごさなければならなかった。……

Lady Gregoryは民話を集めながらコテージからコテージへと私を連れ歩いた。毎晩彼女はコテージで聴いた方言を書きだした。もし私の記憶が正ければ20万語を書留め、彼女は舞台の上で使うあの生き生きとした英語を発見した最初の人であった。(拙訳)

このようにGregoryは古代ゲール文学をKiltartan English (アイルランドの農民が話す英語の一方言を文壇に紹介した「最初の人」であることはイエイツばかりでなく自らも認めていることになる。Lady Gregoryは彼女がゴテージを訪ね歩きまたは仕事場で農民たちから聞き書き留めた膨大な話の中からほとんど忘れ去られていた古代神話・伝説・英雄物語とアイルランド人の精神的支柱となってきた聖人と奇跡の二本立てにし「かつて乳母がしてくれたように子供にでも分かることば」を使って出版

した。彼女の目的は英国の植民地としてその支配下に置かれ、ゲール語は禁止され英語のみ話すよう強制された中でアイルランド人としての誇りも自覚もすっかり忘れてしまっていた人々に5-6世紀に黄金文化の時代を築いた自国の言葉文学を通じアイルランド人としての自覚を覚醒させることにあった。1932年没するまで80年の生涯を古代ゲール文学の復興にその人生と財、情熱を捧げた波乱の人生であった。

4. 作品のあらすじ⁵⁾

*BOOK THREE BLESSED PATRICK OF THE BELLS*は以下Patrickの生涯について15話から成る。

第1話 The Four Households (HE)

Patrickの出生からアイルランドに隸として連れてこられたこと。

第2話 He gets his Freedom (HE)

Patrick奴隷から解放される。tinkerが人々に嫌われ、smithが祝福される理由

第3話 The Man and Woman that were always Young (SE) + (HE)

Patrick、本国に戻るが夢のお告げでアイルランドに戻る決心、Germanusに学び、ローマへの途中、彼の宣教を待つ若い男女に出会いキリストが残したという杖を受け取る話

第4話 Patrick goes back to Ireland (HE)

Patrick、Germanusの元へ戻る。ローマで主教となりアイルランドへ向かう。島ではHigh King達、druid達が伝道者達の来島に動揺する。

第5話 The Deer's Cry (SE) PatrickがTeamhirへ宣教に行く時に謳った有名な賛美の一節。

第6話 Patrick and the Big Men (SE) Fianna族の族長Caoilteとの会談

第7話 The Hidden Well of Usnach (HE) + (SE)

Patrick Usnachの丘でDiarmuid王に会う

第8話 Patrick and Cascorach the Musician (HE) + (SE)

Fianna族の王に仕えるthe Musician (ハープの名手) CascoracはPatrickに会う

第9話 Patrick's Farewell to Caoilte (HE) Caoilteとの別れの場面

第10話 Bodb Dearg's Daughter (HE) + (SE)

Bodb Dearg's Daughter Aillenmがどのようにして、晴れてConnacht王Aedhとアイルランド初のキリスト教による結婚式を挙げるに至ったか

第12話 The Soul and the Body (HE) Patrickが死にかかっている男性のところに行き、洗礼を受けた時の事

第13話 Patrick's Rush Candles (HE) Patrickがある貧しい人が住む家に行き燈心草を取ると一晩中明かりが灯った

第14話 His Church at Ardmacha (HE)

Patrick がArdmachaの丘で雌鹿と小鹿を見つけ殺そうとする従者を止めると雌鹿がついてきた。後に彼が小鹿を下した所に教会が建てられた。St. Patrick Cathedral (Roman Catholic), Ardmachaの由来

第15話 He is Waked by the Angels (HE) 彼の前夜祭(お通夜)が天使によって執り行われた。

15話のうち第5話・6話のようにSEのみで書かれたものHE、SEが混ざったものHEのみで書かれたものが混在している。多くの語り手の語り口を生かそうとしていたことがわかる。

5. 作品中に見られるゲール語法について

以下Gregory *A book of Saints and Wonders* の*Book Three Blessed Patrick of the Bells* よりゲール語に由来すると思われる特殊語法を

- ① 1行目：テキスト原文（グレゴリーの作品）説明する箇所に下線を施す
- ② 2行目：ゲール語訳（現代アイルランド語）（フェスタス ジェニング訳）
- ③ 3行目：英語の直訳
- ④ 4行目：標準的な英語
- ⑤ 5行目：日本語訳（拙訳）

の順に取り上げ、説明、考察を加えていく。

5.1 第3巻 Book Three のタイトルについて

- ① <原文> *Blessed Patrick of the Bells*
- ② <ゲール語訳> Pádraig Naofa na gClog
- ③ <英語直訳> Patrick /holy (saint) /of the/ Bells
- ④ <標準英語> St. Patrick's Bells (the Bells of St. Patrick)
- ⑤ <日本語訳（拙訳）>： 聖パトリックの鐘

Blessed：カトリック用語の「福者」の意。教会がその死後に聖人（殉教者や徳の高い人）として認める前の段階にある。ここではその半生の物語なのでSt.は使わずPatrickという名前で終始物語られている。またBellsのBと韻を踏んでいる。

Patrick：アイルランドでよく使われる男子の名はゲール語ではPádraigポードリックであるがラテン語ではPatricius（高貴な）を意味し、彼は貴族の出身であったと考えられている。Pádraig Naofaと語順が英語と逆になっているのは、ゲール語では原則として形容詞が名詞のあとに置かれるためである。

Naofa：holy, sanctifiedの意味でPádraig NaofaでSaint. Patrickとなる。このようにゲール語に置き換えてみるとPatrickの半生の物語るのに死後に贈られるSaintよりもBlessedのほうがタイトルにふさわしく、韻を踏ませることもできることからBlessedを選んだのではないかと考えられる。

na：ゲール語属格の複数名詞に付く定冠詞で次に来る名詞が男性名詞なのでClogはgClogと語頭変化を起こしている。

Clog：男性名詞で複数形となる。

St. Patrick's Bells (The Bells of St. Patrick) of the bells の名前で文学作品によく登場する。

このようにゲール語から英語に直訳することにより話者の発想を理解することができる。

5. 2. 1 第1話 The Four Households のタイトルについて

- ① <原文> : The Four Households
- ② <ゲール語訳> : Na Ceithre Teaghlaigh
- ③ <英語直訳> : the / four / households
- ④ <標準英語> : the four households
- ⑤ <日本語訳 (拙訳)> 4世帯

household : 使用人を含めた家族のことを意味する。先のNaofaの例に対し数詞のceithre (数詞) + 主格複数形男性名詞の語順となっている。

<原文>⁶⁾ (1) There were many great saints among the Gael, (2) but Patrick was the bush among them all. (3) It was beyond the sea he was born, (4) and his mother was a sister of Saint Martin of Tours; (5) and he dreamed in Rome. (6) and walked all Ireland barefoot. (7) It was in his young youth he was brought from France to Ireland as a slave, and he was set to serve four households, and he did his work so well that every one of the households thought him to servant to itself alone and it was by an angel the ashes used to be cleared away from the hearth for him.

<共通英語> There were many great Irish saints but Patrick was the best. He was born across the sea. (He was a foreigner.) His mother was the sister of St. Martin of Tours. When he was in Rome he had a dream that he walked around Ireland barefoot. When he was young he was brought to Ireland as a slave from Gaul. He worked for four households (families) but he did his work so well each family thought he worked for them alone. But an angel helped St. Patrick by cleaning out the fireplaces (hearths).

<拙訳>多くの偉大なアイルランド人聖人の中でパトリックが最も優れていた。彼は海外で生まれた。(彼は外国人であった。) 彼の母はトゥアーの聖マルチヌスの妹であった。彼はローマに居た時にアイルランド中をはだして歩いている夢を見た。彼は若かったころ、奴隷としてゴール(フランス)からアイルランドに連れてこられた。そして彼は4世帯に仕えなくてはならなかった。どの家にもよく仕えたので家人は彼が一人で働いていると思っていたが一人の天使が暖炉の掃除をしてパトリックを手助けしていたのであった。

(1) 英語の背後にあるゲール語の句

- ① There were / many great saints/ among the Gael,
- ② *Bhí/ naomh /mór/ go leor/ i measc /na nGael.*
- ③ There were / saints /great /enough / among (in the midst of) /the Irish
- ④ There were so many great saints among the Irish.

- ⑤ かなり数多くの偉大なアイルランド（人）の聖人がいた。

Bhí naomh : *Bhí*は存在動詞*bí*の過去形で英語の*be*に相当する。ゲール語の語順では動詞＋主語となる。*naomh*がこの文の主語である。i、óの´（ファータ）は長音の印である。

mór : 英語の*great, big*に相当する。形容詞でこれも後ろから名詞の*naomh*を修飾している。見かけ上は標準英語であるがアイルランド人の頭の中ではゲール語からの直訳作業が行われているのである。

go leor : *enough*の意。*go leor*はイディオムとしてよく使われる。

i measc : これも＝イディオム（前置詞句）である。古英語の「a…の中で」＋*-mong*（集合、群衆）＝*gemang*）＝群衆の中に囲まれて（混じって）に相当すると思われる。

na nGael : *na*は定冠詞の複数形である*Gael*アイルランド人（男女）或いはスコットランド人（特にハイランダー）を指すこともある。古くアイルランドのケルトたち（Qケルト）は自分達のことをGaelicと呼び他のPケルト（Gaul）と区別していた。

(2) 音訳 bush

- ① but Patrick was the bush among them all.
- ② —
- ③ the best
- ④ the best
- ⑤ 最も優れた（人）

このbushはアイルランド西部の方言で標準英語のbestのことで方言の発音が発音が似ている英単語に当てはめ、音訳したものと考えられる。英単語がゲール語の影響を受けた顕著な例と言えよう。では何故bushがbestになるのか。ゲール語の子音には狭子音と広子音とがあり広母音には広子音が狭母音には狭子音が続く、というルールがある。/e/は広母音なので狭子音の/ʃ/が続き、/e/は弱くなりまた/ʃ/の後の/t/は消失し発音されない。従ってbestは/bʃ/と発音されるグレゴリー夫人はこれを音訳し、bushを充てたと考えられる。このような例はゲール語の人名や地名に数多く見受けられるが普通名詞に摘要されているケースは少なく、この作品ではここだけである。夫人は話の冒頭でこの語を使う事により読者の関心を引き、HEを強調したかったのではないか。

(3) It …that構文

- ① It was / beyond the sea / he was born,
- ② *Ba/ thar lear → /a/ rugadh / é*
- ③ It was/beyond the sea (overseas) / (that) / (was) born / he
- ④ He was born across the sea. (He was a foreigner.)
- ⑤ 彼は海の向こう（海外）で生まれた。（彼は外国人であった。）

一見強調構文のようであるが特に強調構文ではなくHEに典型的なゲール語構文に由来するものであ

る。ゲール語では平叙文では動詞が先に来る構造を持つ。*Ba*は繫辞*is*の過去形、*thar lear*はゲール語では句になっている。*a*は接続詞の*that*、*rugadh*は動詞の過去形、英語の、*give birth*、*bear*に相当するが通常英語では受け身の形をとる。言外に含まれる意味は「彼は外国人であった」ということでこれは先の文中の彼は*the Gael*（ゲール人、つまりアイルランド人）であったということと矛盾する。或いは第1文と第2文の話者は別人ではないかということが推測される。

(4) ゲール語の基本構文

- ① and his mother was a sister of Saint Martin of Tours⁷⁾ ;
- ② *agus / ba deirfiuir /le/ Naomh Mairtin /as Tours a mhathair;*
- ③ and /was a sister /of the /St. Martin/from /Tours/his mother/
- ④ and his mother was St. Martin of Tours
- ⑤ 彼の母はツアーの聖マルチヌスの妹であった。

構文上は標準英語と変わらないがゲール語では基本的な文構造は不完全自動詞の扱い方A型 不完全自動詞＋主語＋主格補語とB型 動詞＋主格補語＋主語の2タイプに分かれる。上の例はB型に属し *ba*（動詞）＋*deirfiuir /le/ Naomh Mairtin /as Tours*（主格補語）＋主語となり、平叙文でありながら動詞が冒頭に、次に主格補語、最後に主語という語順をとる。定冠詞*a*は*m*が来ると語頭変化を起こし*mathair*が*a mhathair*に変化する。

(5) 過去形と過去進行形

- ① and / he dreamed / in Rome
- ② *agus / samhlaíodh se / sa Roimh,*
- ③ and / imagined /he /in Rome
- ④ And he had a vision (when he was) in Rome.
- ⑤ 彼はローマにいる時に幻を見た。

samhlaíodh：動詞の過去形＋主語の構造*dreamed*にもその意味はあるが*imagined* (a vision) のほうが相応しいと思われる。ここでは単に寝ている間に夢を見たのではなく、神から示された幻を見たのである。新約聖書の「使徒の働き」の中でサウロが同じような体験をしたことが書かれている。

(6) 過去形と過去進行形

- ① and walked all Ireland barefoot.
- ② *go raibh sé ag siuagus /ar fud /na hEireann / (agus e) /cosnochtaithe.*
- ③ was he / at walking/ throughout / the Ireland / barefoot
- ④ He walked around the Ireland barefoot.
- ⑤ 彼はアイルランド中を素足で歩いた。

go raibh : *go*は動詞に付く不変化詞。*Raibh*は*bi* (繫辞、英語の*be*に相当する) の過去形。

sé : =*he*

ag siuagus : *ag* 英語の前置詞*at*に当たり、ゲール語でも前置詞の働きをする。*siuagus* (=walking) は動名詞である。英語にも*The house is a-building.*のようにかつて前置詞+動名詞が進行形として使われていた名残がある。他の多くのHEで書かれた作品では進行形が使われるところでHEに進行形が目立つ理由でもある。語り部(話者)が共通英語で語ったものをそのまま書きと留めたとも考えられるが、Gregoryは敢えて共通英語を使って書いていると思われる。方言が多くなると共通英語しか知らない読者には何のことかよく分からず、話の筋が追えない、という問題があるからである。

ar fud : 英語で*all*が使われているがゲール語では*ar fud*という慣用句になっている。

(7) 名詞+形容詞

- ① And it was in his young youth
- ② *Agus/e / ina / oganach / óg*
- ③ and it was / in his / youth (young man) / young
- ④ and it was in his youth. (It was when he was young.)
- ⑤ 彼が若かった時のことであった。

共通英語であれば*and it was in his youth*又は*when he was young*というところを*young youth*と同じような言葉を重ねて使うのはHEの特徴的な語法の一つである。ここでも形容詞は名詞の後に置かれている。

(4)~(7) *agus* (=and)

文頭に来る*and*の頻用、これは明らかにゲール語の影響によるものである。ゲール語の*agus*には英語の*and*の他に*when, while, as, if, though*,など節を導く接続詞として色々な働きがあるからである。現代のアイランド作家だけでなく広く一般庶民も多用しているのが見られる。

6. まとめ

1. 文体の不統一性

Book IIIに収められている15の話は色々なところから集められたもので文体が統一されていない。ひとつの話の中に方言と共通英語の混在することから複数の人が語ったものを集めたものであろうということがわかる。編集者は文体を統一して作品をまとめるのが一般的ではないかと考える。

2. SEで書かれた話の存在

The Deer's Cry のように方言が殆ど出てこない、純粹に共通英語で書かれたものも収録されている。(16、17世紀頃或いはそれ以前の古い英語が随所に見られる。)

3. SEによるHEへの置き換え

方言が強調される一方、after -ingなどHEに特徴的な表現が共通英語の現在形 (have + 過去分詞) に置き換えられている。これは当時英語しか分からない人が殆どの時代、方言を多用してしまうと方言が分からない読者を獲得できなくなる。後の*The Kiltartan Poetry Book*他にはこうした特徴がもっと色濃く出ていることから考えると *A Book of Saints and Wonders*は彼女の初期段階に出版されたものであり「子供にでも理解できるように」というところに視点がおかれ、敢えてゲール語的な構文は避け、bushのような名詞の音訳といった程度に抑えていたのではないか。まだ彼女にとってHEを使って書いた作品が読者にどう受け止められるか、反響を試す試作段階にあったのではないかということである。

4. 接続詞のAndで始まる文、類語の反復が多い。

この作品には接続詞Andで始まる文などその名残、ゲール語の影響が英語に及んでいることがわかった。この作品はGregory夫人が創作した、というより編集されたものである。HEとSEの混在は当時の言語状況を反映していると思われるが英語しか知らない人々に対し、極力語り手のことばを生かし、随所に方言を残しながら時には敢えて共通英語に置き換えたりして共通英語の話者、方言英語の話者の双方に古代ゲール文学の素晴らしさを伝えようとする夫人の思いと工夫の跡が垣間見られるように思われる。

以上今後は更にアイルランド方言のもう一つの柱、エリザベス朝時代に入ったことば、や固有名詞の扱いに研究対象を広げていきたい。

本稿においてゲール語 (現代アイルランド語) 訳は 早稲田大学講師のフェスタス ジェニングス氏にお願いした。また本稿は2017年3月25日にアイルランド文学研究会にて発表した原稿に大幅な加筆と訂正を加えたものである。

[注]

- 1) Irish Renaissance (Celtic Renaissance) ともいう。古代ゲール文化の復興運動で文学、演劇、言語、スポーツ、ダンスといった総合的に文化を取り上げアイルランド人の愛国心を鼓舞し、イギリスからの独立を促そうとすることが目的であった。
- 2) 英語のGaelic <*Gaelige* (現代) ゲール語 <Gaedelic (Goidelic) <Gaedheal Glas (聖書のノアの孫息子) に由来する。このGaedheal Glasがアイルランド語を作ったと言われている。
- 3) Gregory Augusta *The Kiltartan Poetry Book* pp.16-17
- 4) *The Collected Works of W.B. Yeats Vol. III: Autobiographies*
W.B.Yeats (1865年～1939年) アイルランドを代表するノーベル賞受賞の詩人、劇作家。1986年Yeatsは初めてGregoryに出会い長年にわたり友好関係を保ちながらアイルランド国立劇場のちのアベイ座を設立しアイリッシュルネッサンス運動を展開していった。
- 5) 第1話～第15話の通し番号は筆者による。()内は書かれた文体。
- 6) (1)～(7)と下線は筆者による。

7) Tourはフランスの地名で聖マルチヌスという名前の聖人は複数名いて○○の聖マルチヌスという呼び方をして区別している。

参考文献

- Gregory, Augusta *A Book of Saints and Wonders*: Colin Smythe Limited, Gerrards Cross, 1972
- Gregory, Augusta *The Kiltartan Poetry Book*: Nickerbocker Press, the, New York, 1919, Hart Publishing USA, 2016
- Gregory, Augusta *Seventy Years 1852-1922*: Colin Smythe Limited, Gerrards Cross, 1974
- (g.ed.) Daniel, Glyn *Ancient Peoples and Places Early Christian Ireland*: Thames and Hudson, London, 1958
- Dolan, terence Ptrick *A Dictionary of Hiberno-English*, 3rd edition: Gill & MacMillan, Dublin, 2013
- Hill, Judith *Lady Gregory an Irish Life*: The Collins Press, Cork, 2011
- Hyde, Douglas *A Literary History of Ireland*: Earnest Benn Limited, 1967
- Joyce, P.W. *English As We Speak It in Ireland*: Originally published Longmans Green, London, 1910
Hard Press Publishing, Lenox, 2012
- Rogers, Jonathan *St.Patrick*: Appletree Press, Belfast, 2009
- Mac Creary, Alf *Yeats Autobiographies*: and Douglas N.Archibald, Scribner, New York, 1999
(*The Collected Works of W.B. Yeats Vol. III, Autobiographies*)
- Mac Poillin, Aodan *Irish Is Fun!*: Ylolf, Ceredigion, 1987
- O'Donnell, William H. *St.Patrick*: Thomas Nelson, Nashvill, 2010
- Wells, J.C. *Accents of English 2 The British Isles*: Cambridge University Press, 1986
- Zingg, Gisela *Is there Hibeerno-English On Them?*: Peter Lang, Bern, 2013
- Collins Easy Learning Irish Dictionary in Colour*: Harper Collins Publishers, Glasgow, 2009
- Collins Irish Dictionary*: Harper Collins Publishers, Glasgow, 2004
- 大野真弓 『イギリス史』: 山川出版、東京、1965
- 三橋敦子,他共著 『アングロ・アイリッシュ語法解明へのアプローチ』: 大学書林、東京、1986
- 松村賢一 『アイルランド文学小事典』: 研究社出版、東京、1999
- 勝田孝興 『グレゴリ夫人』(研究社英米文學評傳叢書, 80): 研究社出版, 1980.6復刻版

